

つ
な
が
り

ま
ち
と

Sun⁰¹⁷

茨城県
東茨城郡
茨城町

Spring 2019



移りゆく季節 その足音 彼方から響く

この地を去る北風 きたかぜ この地へやって来る花信風 かしんふう

それぞれに そっと声をかけるように しゅんよう 春陽が地を照らす

Sunは 茨城町と ゆるやかにつながる いくつもの縁を

人々の暮らしや情景と共に

綴り 伝えていきます



撮影場所:高橋

茨城県
東茨城郡
茨城町
Sun
Spring 2019

Contents 目次

03 特集一わたり

この地を訪れる鳥たち

06 わたりを追う

野鳥を愛する人たち

09 まちで暮らす人

まちを想う人

15 Sunがつくられるところ

細部にこだわり丁寧につくる

17 連載 マチのケシキ

18 編集室から



Cover
写真 / アラタケジ モデル / 松浦陽菜
“わたっていくも わたってくるもの”
2月のある日の朝
町のシンボルである高橋で撮影。
何処から聞こえる春の足音を記録するように
そっとシャッターを切りました。



特集
わたり

この地を訪れる鳥たち

写真 | 竹内慎 清水道雄 文 | 石川聖太 笠井峰子

貴種流離譚「きしゅりゅうりたん」という言葉がある
旅に出て各地を放浪し 幾多の試練を乗り越え
神や尊い存在になるといふものだ

人間は 定着することで文明を築き上げてきた
一方で 何処にも縛られず 放浪する存在を尊く思う

渡り鳥は不思議である

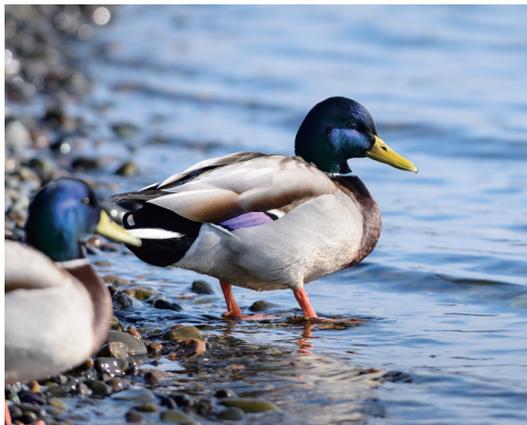
果てしない大海原を 険しい山々を越え
遙かな地を目指し 命を懸け飛んで行く

そこには 生きるためだけではない
何か別の目的があるのかもしれない

数千にも及ぶ渡り鳥の群れが 再びこの地にやって来た
ここで暮らす私たちへ
わたりを誇示するかのよう

この地を訪れる 鳥たちを紹介しながら
わたりの持つ意味を考えます

夜明けの空を飛ぶスズガモの群れ。10月から3月にかけて、越冬のため酒沼を訪れる
朝夕には空を埋め尽くすスズガモの群れを見ることが出来る



わたりを追う ― 野鳥を愛する人たち

冬のある日 一羽の渡り鳥が飛来すると
その姿をカメラで捉えようと 各地から渡ってくる
野鳥の愛好家たちで湖畔はにわかに活気づく

国の天然記念物であり絶滅危惧種のオオワシ。

涸沼には、一九九八年以来約二〇年間、毎年一羽のオオワシが訪れ続けている。一月下旬のある日、そのオオワシの雄姿を目にするため、アマチュアカメラマンである清水道雄さんの撮影に同行させていた。清水さんは、涸沼のオオワシをはじめとする野鳥の写真で知られる人であり、湖畔にある「いこいの村涸沼インフォメーションプラザ」のスタッフも務める方だ。朝九時に涸沼湖畔で清水さんと待ち合わせる。すでに一〇日ほど前にオオワシの飛来が確認されているというから、ますます期待が膨らむ。しかし、清水さんからは開口一番こんな言葉が。「いやあ、昨日から姿を現していないんだよ。今日もどうかなあ」。そう言いながら、手慣れた様子で直径二〇センチほどのもある巨大な望遠レンズをカメラにセットする。気づけば、清水さんと同じように大きな撮影機材を抱えた人たちが次々と湖畔に集まってきている。「やあ、こんにちは。そうなんだよ、昨日から姿を見せないんだよねえ」「ああ、しばらくぶり。今年は今日がはじめて?」。彼らとすれ違ったり、明るい声で挨拶を交わしていく清水さん。「だいたいここに来る人たちは知り合いですよ。さきほどの夫婦は千葉の方。オオワシの季節にはとくに、地元はもちろん、全国から野鳥愛好家が集まってくるんです」。カメラのセッティングが終わると、清水さんは自らの作品をファイルしたポートフォリオを見せてくれた。

野鳥は世界で約九千種、そのうち国内で見られるのが六三三種。涸沼ではおよそ三分の一にあたる約二二〇種の野鳥がこれまでに観察され、本州の中央部に位置し太平洋からも近いこの地が、多くの渡り鳥にとって重要な場所であることを物語っている。

渡り鳥は、一般的なイメージのある越冬の為に訪れる冬鳥、暖かくなる春から初夏にかけて訪れる夏鳥、春と秋に旅の途中で立ち寄り羽を休める旅鳥の三つに分けられる。涸沼で見られる鳥たちの実に七五パーセントが渡り鳥。マガモなどのカモ類が多く、中でも冬鳥のスズガモは、毎年数千から一万の群れで飛来し、涸沼の冬の風物詩となっている。涸沼を訪れる鳥たちの中には、迷鳥と呼ばれる鳥たちもいる。悪天候などのさまざまな理由で、本来の目的地ではないところに飛来してしまう鳥たちだ。これまでは、ヒマラヤ山脈をも越え、鳥類で最も高所を飛ぶアネハツル、主に東南アジアに生息し、日本では動物園などで見ることのできるハイロペリカン、ユーラシア大陸に広く分布するオジロワシなどが確認されている。鳥たちは、湖周辺のさまざまな場所で思い思いに羽を休める。水田には夏鳥のアマサギたちが顔を寄せ、西側に目を向ければ、自然植生が残るアシ原にコガモやホオジロガモなどが姿を現し、肉眼で見るのが難しい東側の湖面にはスズガモの大群が浮かんでいる。

季節が変わり、わたりの時期を迎えたある日、鳥の群れは一斉に空へ飛び立ち、太陽の位置や星座、地磁気、地形などを利用し、遠く離れた目的地へ再び渡っていく。私たちには到底真似することなどできない。わたりをやめ、留まることで文化を築いた私たち。わたりを繰り返し、命を紡いできた渡り鳥たち。移動して生きることが生物の本能であるとするならば、わたりという行為を選んだ鳥こそ、尊く美しい存在に見えてくるのではないだろうか。



半切サイズほどに引き伸ばされたプリントには、まん丸の黒い目と頑丈そうな黄色い嘴を持つオオワシが、大きな体で悠然と飛翔する姿や、両足で獲物の魚をガツリと掴み湖面から飛び立とうとするところ、他の鳥にモビング（*）を仕掛けられ猛々しく威嚇する様など、涸沼を舞台に躍動する姿を見事に捉えている。「はじめはオオワシと出会ったのは、私がまだ日本原子力研究開発機構に勤めていた頃。出勤途中に偶然見かけてね。当時から趣味で風景写真を撮っていたので、興味を持ったんです」。

話を聞いている間にも清水さんの携帯電話が何度か鳴る。「え、ミコアイサとホオジロガモがいる？ああそう、間もなくそちらに行きますよ。うん今は赤い橋のほうだから。はい、後ほど」。オオワシ以外にも希少な渡り鳥が次々と飛来する涸沼。今日のようにオオワシが姿を見せない日であっても、野鳥愛好家の気を引く対象はいくらでもいるのだ。

「野鳥を撮るコツは、情報収集と忍耐」と清水さんは語る。オオワシは七時間も止まったまま動かないときもあるのだという。「飛び立つ瞬間を撮ろうとずっと構えていて、用を足しにちよつとだけ離れたら、その隙に飛び立ってしまった（笑）。ただ、私はアマチュアカメラマン。あくまで趣味だから何がなんでも鳥を追いかけることはしない。オオワシの寝床を知ってるよ、と言う人がいるけど、寝床にライトを当てて撮るようなことには興味がない。僕の仲間はずです」。言葉の端々からオオワシに対する敬意を感じる。「オオワシが姿を現さない日でもね、仲間たちと話すのは何より楽しい。目的を同じにする者たち同士だから、スツと純粹につながれるというんですか。…ああ、もう十一時か。そろそろ終わりにしますか」。

結局この日、オオワシに会うことはできなかった。しかし、冬の澄み切った空気の中、野鳥を愛する方々と言葉を交わす時間は、とても清々しく心地良いものであった。最後に聞いてみた。清水さんにとって野鳥観察とは？「それはね、最高の暇つぶし！」そう言っつて、この日一番の笑顔を見せた。

自然に対する尊敬の念、信頼感と連帯感。先ほど目にした清水さんと仲間たちの軽やかな挨拶の背景には、それがある。豊かな涸沼の環境は、鳥たちを優しく育むだけでなく、営みを静かに見守り、互いに喜びを共有する人間たちの関係をも象徴している。

ファインダーから覗く、野鳥の羽撃き、狩りの躍動感、命の営み、生命に対する興味をそのまま残す。湖上で野鳥の群れが、人々の営みを注意深く見下ろすように翼を広げる。人と鳥、二つの生物が、互いの手が届かないところで生きる。そこそが、自然とともに暮らすことであり、ひいては多様性に繋がる。そのためにも、生物同士の距離感は大切なのだろう。各々が湖畔でカメラを構える様子を見て、そんなことを思った。



清水さんが捉えたオオワシの姿。翼を広げるとその大きさは2メートルを超える



*: やかましく鳴きたて、突撃するように飛び回る擬似攻撃

清水道雄（しみずみちお）茨城町在住。
涸沼湖畔にあるいごいの村涸沼インフォメーションプラザにてスタッフを務める。涸沼でのオオワシ撮影の第一人者。

まちで暮らす人 まちを想う人

写真：アラタケンジ 文：笠井峰子

Feeling & Thinking

人が集う場所を継ぐ

まちで暮らす人

蘭部商店 店主 蘭部隆紀

To makes the field



こだわりのつくる

私が米粉パンの専門店「蘭部商店」を本部地区にオープンして、ちょうど二年が経ちました。これは私の実家であり、もともと両親が同じ蘭部商店という名で食品や日用品を扱う店を営んでいた場所なんです。私の家系を遡ると、最初に商売をはじめたのは一〇〇年以上前。祖先は店を持たずに行商をしていたようで、そのうちに精米所を構えて米や酒、調味料を売るようになり、その後は今というコンビニのような、食品と日用雑貨を扱う店になりました。蘭部商店の店主としては私が五代目になります。

毎朝五時前に目覚め、すぐに仕事を始めます。前日に仕込んだ、パン生地を機械で膨らませ焼き上げていきます。店のオープンは九時からですが、開店前からお客様が来店。用意できるパンの数はまだ少ないですが、コーヒーマシなども淹れられますし、朝食をイートインスペースで食べる方もいらつしやいます。

約三〇種のパンを、十時には一〇〇個ほどを焼き終えます。私のパンはすべて米粉パン。精製した砂糖や塩の他、トランス脂肪酸が入ったマーガリンなど添加物をできる限り抑えた体に良い素材でつくりたいと考えています。が、グルテンが入っていない訳ではないんです。お客様の要望で、グルテンを少し入れた味が好まれるので、そうした声にも応えるようにしています。遠方からいらつしやるお客様には、グルテンを入れないアレルギー対応のパンも焼けますし、まとめてお買い上げいただけるのであれば予約もできるので、次はぜひ事前にご連絡くださいね、とお伝えしています。

目標を探し求めて

私は団塊ジュニア世代。小さい頃は同年代の友達が近所にたくさんいたので、当時の蘭部商店は、子供たちの社交場のようになっていました。駄菓子やガチャガチャなどもあったので、学校が終われば、ここがみんなの集会所。

この場所から外に出かけてサッカーをしたり、家の中でゲームをしたりと、とにかく夢中になって遊んだ、楽しい子供時代でした。

中学に進むと部活で柔道をはじめ、高校まで続けました。特に高校時代は柔道に明け暮れ、卒業後はクラスの担任の勧めで警備保障会社に就職しましたが、柔道をやっていたからか、こういう仕事が合っていると思われて勧められたのですが、今思うと合っていたのかなあ(笑)。警備の仕事は〇年ほど続けましたが、歳を重ねるとより身の危険をリアルに感じるようになり、何より泥棒や不審者がいるからこそ成り立つ仕事というところに、どうしても違和感を拭うことができず、他にやりたいことを探しはじめました。

その頃、実家を出て一人暮らしをしていたのですが、気づくと部屋に料理本がたくさんあったり、調味料もそこそこ揃えていたり。ああ、ひよとして自分は料理が好きなのかな、と気づき、料理の道に進んでみることにしました。調理専門学校に一年通い調理師免許を取得し、学校の中華の先生が料理長を務める飲食店に勤めました。五年くらいしたら大抵のものはつくれるようになっていましたから、手際は良いほうだったかもしれないですね。

米粉パンとの出会い

その後、病院や福祉施設で給食に携わる仕事に就いて、それがきっかけで「食事で人を健康にすること」に興味を持つようになったんです。病院調理師免許という、栄養士と医療に関する知識を併せ持つ資格も取得して、ちょっと健康オタクのようになりまして。自分でもできる限り添加物の入っていない食品を選ぶようになり、小麦に含まれるグルテンが腸に不調をきたすことがあると知って、小麦を摂らない生活をはじめてみたんです。添加物を摂らないことは原材料表示を見て選べないので比較的簡単ですが、一方グルテンを摂らない生活は、パンも麺も食べられずなかなか大変だということに気づきました。そんな中、あるきっかけで知った、米粉パンに興味を持ったんです。

病院給食の仕事は、だんだんと手を動かさない管理的な業務が多くなつてしまいい、自分には合わなくなり退職しました。その後一年くらいは、米粉を使ったパンを探しに各地を巡りました。当時地元には米粉パンを取り扱うお店はなく、米どころである新潟へ行き、パンを食へ歩いたのですが、結局米粉だけをつくるパンというものは見つからず。その後インターネットで調べ、行き着いたのが、宮城県の米粉パン専門店。グルテンを少し加える製法でしたが、もともと米屋さんをはじめたパン店で、自家製の米粉を使ったパンをつくる他、技術的な研修も行ってたので、そこで米粉パンづくりを学ぶことにしました。三カ月の研修も無事に修了。さて、店をどこで構えようかというときに、パンづくりの先生から「実家で商店をやっていたのなら、その場所でするのがいい。米粉パンは珍しいから多少田舎でもお客様は来てくれるから大丈夫」と助言をもらったんです。当時、父が亡くなり、母がひとりで切り盛りしていた店を閉めて五年ほど経ち、店内が物置のようになってしまっていて。母も、もし失敗したとしても、店先がきれいになって居住空間として残るからいいだろうと言ってくれたので、実家を改装し米粉パン専門店を開くことにしました。改装は、小学校時代の仲間で大工になった友人に頼み、指導の先生の勧めもあり、両親の店の名前「菌部商店」を受け継ぐことにしました。

ふたたび人が集まる場に

開店当時に新聞の折込広告を出したところ、店の前に多くの方が並んでしまつてパンが間に合わず、帰っていただいたこともあり、大変申し訳ないことをしました。今は、ひとりでやれるペースに落ち着きました。

オープンして二年経ちますが、心から良い経験ができていますと実感しています。まだまだ満足はできていないところもありますが、うちのパンを選び、喜んで買ってくださいのお客様がいる。小麦のパンはあまり好きじゃないが、なんだかこのパンは食べたくなる、と言ってくれる方もいる。そんな声を聞

くとたまらなく嬉しいです。体に良い素材だけを使っているので、気づく方は気づいてくれるのだと思います。小学校の頃に遊んだ仲間が、今は奥さんと子供を連れてパンを買いに来てくれる。彼らも懐かしい思い出の場所に来てくれていると思います。

今まで店を継ぐと強く意識したことはなかったのですが、以前とは違った形でお店を継ぐことになり、結果として良かったのだと思います。かつては精米所だったところもあるこの場所に、米粉パン専門店を開いたのも何かの縁を感じざるを得ません。そうですね、先祖たちもきっと喜んでくれてるんじゃないでしょうか。



菌部隆紀(そのべたかのり) 1977年茨城町木部生まれ。小・中・高校を茨城町で過ごし、さまざまな職種を経験後、米粉パンと出会う。2017年、自身の生家にて米粉パン専門店「菌部商店」をオープン。

向上心を持ち、変化を生む

まちを想う人

茨城郵便局長 高木健一



Improvement and Change

片道三時間をかけ茨城町へ

二〇一八年の四月に茨城郵便局長を拝命し、今は毎日、自宅のある千葉県の船橋市から電車を乗り継ぎ、JR常磐線の石岡駅からバイクがバスに乗り郵便局まで通っています。片道約三時間の道のりになるので、起床は朝四時前です。もう少し近いところを越せばいいのと思うかもしれませんが、次はどこに転勤を命ぜられるかわかりませんので、通えるときはできる限り自宅から通うようにしています。郵便局に就職して三四年間、かつての郵政省・日本郵政公社の時代を含め、さまざまな部署を渡り歩き、日本郵政グループ内にも出向しました。勤務地は主に霞が関で、通算すると二〇年以上も霞が関に勤めていたことになりました。

クリエイティブな仕事に憧れて

地元である千葉県内の高校を卒業してから、大学には進まずに郵便局に入りましたので、はじめから霞が関で働いていたわけではありません。

一九八五年に就職して最初に配属されたのは、神奈川県の座間郵便局で郵便内務事務を四年ほど勤め、環境を変えるため、地元に近い千葉県の更津郵便局に転勤しましたが、毎日コツコツと同じ仕事を一生することに疑問を感じ、もう一度勉強し大学を受験しようと思いはじめた頃、上司からこんな言葉をかけられました——うちには研修制度が充実していて、給料をもらいながら二年間高度な教育を受けられる仕組みがある。それに挑戦してみたらいいじゃないか。その研修生に選ばれば、霞が関(当時の郵政省)で働くことができるよ。身の程知らずにも、もつとクリエイティブな仕事をしたい。そのためには机が必要。局内の仕事に馴染めなかつた理由の一つに、自分の机がない、ということもあり、公務員の聖地、霞が関に行けば、きつと自分の机を持つことができる！そのためにも、ここががんばって勉強してみるか——そう決意を固めたのでした。

いざ、霞が関へ！

研修修了後、霞が関の郵政省に赴任します。私をはじめ自分の机を得ることができた場所です。小さくても、自分の文房具や書類のファイルをいつでも置いておける場を持つ喜びをかみしめました。職場の規模もこれまでとは段違いで、ビル内では三千人もの人が働き、各部署が大きなプロジェクトに向けて常に動いているダイナミックなところでした。

霞が関で最初に配属されたのは、簡易保険局要員企画室という、全国の郵便局の保険関係の人員配置を計画する部署です。この部署で生命保険係部署へ説明。その変更が現場に与える影響を調査、裏付けと調整を行い全国へ文書で通知——当時は通達と言いましたが、上司の名前で全国へ発出されていくときには、やはりある種の感慨深いものがありましたね。その業務を七年間続けたあと、自分が研修を受けた郵政研修所の教官を、二年間務め、

正しい学びと固い絆

しかし、その二年間の研修を受けるための試験は、当時最難関の試験。郵便局の社員が毎年三千人以上受験し、合格者はわずか三〇人。競争率は約一〇〇倍。郵便局の現場を経験した能力の高い社員を発掘し、霞が関のキャリアに交じり仕事をするための知識を身に付けさせる研修だったのです。

試験科目は法律、経済、経営、一般教養など高卒レベルのものではなく、このままではきつと何度受けても合格できないと判断した私は、二年間の研修とは別の、半年間の研修制度から挑戦をはじめることになりました。

こちらの研修制度の競争率は約三〇倍とだいぶ下がります。それでも四回目の試験でようやく合格し、晴れて東京都国立市にある郵政研修所での寮生活を始めることになりました。一九九〇年のことです。そこで生まれてはじめて、「正しい勉強の仕方」というものを知ります。

それまでは、勉強をしようと思いついたらまず自分なりの学習計画を立て、夜食のラーメンで腹ごしらえをしてから勉強にとりかかり、二時間もすると「ああ、けっこうやったな」などと思うのが常でした。しかし、寮で同部屋になった秀才の勉強法は全く違いました。常に自然体で学び、気になることがあれば、すぐにテキストを開いて確認、驚異的な集中力で学習するから机に向かう時間は決して長くない。衝撃的でした。

彼のやり方を真似ながら文字通り必死に勉強へ取り組み、いよいよ試験に挑戦するときがやってきました。しかし、年齢制限があり、二六歳の私は一回しか受験資格が残っていません。もう後がなく、背水の陣で臨み、全ての運と力を使って難関を突破しました。

郵政大学校での二年間はかけがえないものになりました。授業は大学の専門分野の内容。大変面白いものですが、仲間たちと寝食をともにした学びの日々は、それまでの人生にはないほど充実した時間となりました。同期の三〇人とは、二五年以上が過ぎた今でも固い絆で結ばれています。

二〇〇四年には郵政民営化に向けての準備セクションとして再び霞が関へ。その後、民営化により郵便局株式会社(現日本郵便)の社員となります。二〇一三年にオープンした東京駅前の商業施設MITSUBISHIのあるJPタワーにおいて、不動産部の社員として数多くのテナントの誘致にも関わりました。その後、かんぽ生命に向向、各企業を訪問して保険に興味のある企業へ保険料払い込み団体の設置の普及促進と開拓部隊の支援をする業務に就きました。こう書き連ねてみると、何だか某新聞の「私の履歴書」のようになっていきますね(笑)。

茨城町の存在を全国に

それから約三年後、ここ茨城町で、茨城郵便局長としての日々を送っています。採用当時の上司からは、局長を目指せと言われました。その後、郵政人生の大半を郵便局とは別の道を歩みましたが、いざ局長に就いてみると、なかなか楽しい。やりがいも感じます。なにしろ、ここには私にあれをしるこれをしる指図をする人間がいまいませんから(笑)。

町の方々に接して思うのは、皆さん親切でやさしい。郵便局が開く九時に「おはようございますー!」とお声掛けすると、必ず反応があります。この町には、よそから来た者を受け入れてくれる素地があると思います。車の運転が少々乱暴なのは残念ですけれどね。

ただ、いざ茨城町を全国に広めようと思ったとき、これといった特産物がないうことが残念です。メロンが特産であるなら、たとえばメロンのワインやスイーツなどをつくるのはどうでしょうか。縁あって赴任したこの町の魅力を、ぜひ私が局長を務めている間に郵便局のネットワークを活かして全国に届け「一度茨城町に行ってみるか」とひとりでも多くの方に思っていたきたい——そんなことに想いを馳せながら、今日も私は四時前に起床し、船橋の自宅から茨城町を目指します。春になれば「国道六号」からの景色は最高でしょう。さあ今日はどんな一日でしょうかね。●



*: 郵政大学校。民営化以前、郵政社員に対し各種研修・訓練を行っていた施設
高木健一(たかぎけんいち) 1965年千葉県館山市生まれ。
1985年に郵便局へ就職。その後、郵政大学校を経て、郵政省へ赴任。
さまざまな業務に携わり、2018年から茨城町の茨城郵便局長に着任。

Sunが つくられる ところ

～細部にこだわり 丁寧につくる～

写真 | アラタケンジ 文 | ホシカワリエコ

カラーといえば光和印刷

本誌のCMを印刷している光和印刷さんは、昭和四十六年水戸市元吉田に創業。平成四年には「茨城町工場」が完成しました。お話を聞き出した工場長の藤田さんは、昭和五〇年に入社。印刷一筋、その道のエキスパートです。光和印刷さんが創業した当時は、ちょうどカラー文化がはじまった頃。まだカラー印刷を手がけているところは少なく、設備なども整ってなかったようで、同業者からの仕事の依頼も多かったそう。美術館のポスターや図録など、印刷の質にこだわる要求度の高いお客様からの依頼が多いのは、カラー文化のはじまりとともに積み重ねてきた、光和印刷さんの歴史そのものなのかもしれません。

肌色を出せれば一人前

印刷にはまず版をつくるという工程があります。カラーならば(CMYK*)の四つの色に分解し一色ごとに印刷の版をつくり、それらを重ね印刷することで一枚の印刷物が完成。言葉で説明すると短く簡単そうに思えるかもしれませんが、実は細かい作業がたくさんあります。印刷物は点と点・網点の重なりでできています。四つの版をずれることなくしっかりと合わせる必要があります。版を合わせたら色の調整。絵の具のようにたくさん色を揃っているわけではなく、先ほどの四色を組み合わせることで表現します。

「もっと健康的な肌色にしたい」という抽象的なお客様の要望にも、経験を頼りに四色のバランスを調整し表現。肌色を出すのが一番難しいと言われていたので、うまく出せるようになれば「どんな色でも表現できるようにする」とか。近年では機器の進化もあり、版の合わせや色の調整などのスピードが速くなりました。それでも基本は変わりません。人の五感と経験に基づいた知識がモノを言う世界。藤田さんは、今では機械で行われることを、若い頃に一つひとつ手作業で行ってきました。その豊富な経験と数多くのお客様とのやりとりを通して自身にノウハウを蓄積。それぞれのお客様の求める完成形を目指し、自信を持って提案できるようになったと話してくれました。

神経質な人が向いている現場

機器のメンテナンスも大切。同じことを繰り返すので、毎日のチェックをはじめ温度や湿度調整を行い、安定して稼働できる環境を整えることはとても重要です。朝、寒さで硬いインクがお昼になり軟らかくなると、印刷の濃度が変わってきます。現場のオペレーターさんたちはそのような変化に対応し、細部までこだわりコントロールをしています。「印刷工場で働く人は神経質な人が向いていると思います。大まかじゃダメ。ゴミひとつでも気にする。本当に神経質な(笑)」と藤田さん。人命を預からない機器では、一番精密ではないかと言われている印刷の機器。その機器をオペレーションするには細やかな神経を持った人でないといけないようです。

求められる品質にこだわる

印刷物の幅は広く、企業のフライヤーからポスターや写真集まで。案件一つひとつ品質にこだわる考え方は「一緒。簡単なようで難しいですが、全部手を抜かないという気持ちで取り組んでいます」と皆さん口を揃えて言います。時代とともに色味や加工、印刷や体裁、仕上がりなど、お客様からの要求度も高くなり、工場でもそれに対応すべく、日々スキルアップをしているそうです。

原稿を入稿した後、特に色などの品質が重要になる印刷物では、お客様自身に工場で刷り上がりを確認していただく「立ち会い」というプロセスを踏む場合があります。この大切な確認のために、わざわざ遠方から足を運ぶお客様も。印刷自体は機械の作業ではありますが、人が調整し、人の目を通して確認する…。最後の最後までより質の高い印刷物を提供するため、しっかりとコミュニケーションをとり、丁寧につくっていきます。

Sunができるまでには制作の段階からたくさんの方が関わっています。印刷は工場ですステマチックに行われるイメージでしたが、実際は細部にこだわった作業とさまざまなコミュニケーションを経て、たくさんの方の想いをのせ、皆さんのお手元に届けられているのです。

*:C/シアン、M/マゼンダ、Y/イエロー、K/キー・プレート(黒)

連載

マチのケシキ



第7回 ヘビと言ひ伝え

絵 | やまなかももこ 文 | 石川聖太



茨城町のプロモーションビデオ「つながりとひと」が完成しました!!!

すでに見ていただいた方もいると思いますが、
 今年の夏、サポーターの皆さんにエキストラとしてご参加いただいた
 プロモーションビデオ「つながりとひと」が完成!
 町出身の女優 根矢涼香さんが主演を務め、
 町内で撮影を決定!
 サポーターの皆さんと撮影したクライマックスシーンでは、
 町ふるさと大使であるマシコタツロウさんがつくった
 テーマソング「僕は潤沼 君はメロン」が流れます。
 皆さんと一緒につくった「つながりとひと」をぜひご覧ください。
 そして、家族や友達など多くの方に教えてあげてください。
 茨城町を通じて「つながり」を広げていきましょう!!!
 「つながりとひと」で検索!



From Sun -編集室から-

Sun 第7号をお届けします。

今回のテーマは「わたり」。鳥だけでなく卒業や入学、就職などで人も長く過ごした場所から離れることが「わたり」なのかなと思いました。この「わたり」の多い時期、鳥たちのように乗り越えていきたいものです。[ひで③] / インドア派な私、長距離を渡る活動をするものには、それだけで尊敬の念を抱きます。遠くからまちを訪れてくれる鳥もお客様、まちでゆっくり羽を休めていただけたらと思います。ただし、アレルギー持ちなので、この時期の花粉だけは早く過ぎ去ってほしいです…。[がっきー3] / 表紙の写真にも使われている高橋は、私も毎日のように通る橋。潤沼川から昇る朝日のエネルギーを受けると、「一日頑張るぞ!」という気持ちにさせられます。また、日中は高橋の上で、ハトが休憩している様子も。鳥たちのことを下からのぞき込むように見るのが密かな楽しみです。[243] / 春、鳥たちが巣立っていく時期でもあります。夢と希望をもって突き進んでいてもらいたいです。応援しています。[ふぁんとむ3改めふぁんとむ4] / 鳥と言えば、ヒッチコック。子供の頃に映画「鳥」を観た後、その辺を飛んでいる鳥が群れて襲ってきたら、と勝手に震えていたのを今回の撮影時に思い出しました。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。

いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2019年7月発行予定です。

Sun 第7号 春号 2019年3月10日発行

企画・発行: いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
 [茨城町 町長公室 秘書広聴課]
 〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
 TEL: 029-240-7126
 MAIL: iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン | iD
 取材・出筆 | 笠井峰子 ホシカワリエコ 石川聖太
 写真 | アラタケンジ 竹内慎 清水道雄
 絵 | やまなかももこ
 印刷・製本 | 株式会社光和印刷
 本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

Special Thanks [順不同]
 松浦陽菜さん 吉尾南月さん 広浦屋 菌部商店
 茨城郵便局 株式会社光和印刷



“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は
 いばらきまちがつくるあたらしくて
 ゆるやかなつながりの場。
 設立から3年目を迎え、
 会員数は700名を突破!
 ますます盛り上がる“いば3”と
 みんなでつながろう!!!



お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

絵: やまなかももこ

画家。絵本作家。女子美術大卒。
 絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
 主な作品に「田んぼのいのち」(くもん出版)、
 「俵万智3・11短歌集 あれから」(今人舎)など。
momokomo.net

溜め池や水辺でよくヘビを見かけるのは
 ヌシの領域に足を踏み入れているからかもしれません



町内で取材をしていると、さまざまな世代の方に話を伺う機会が多く、その土地の謂れや言い伝えに触れることも多い。水辺や動物が出てくる話がいづつかあり、中でもヘビに纏わる言い伝えは少なくない。

ヘビは、その独特の姿や習性からか、世界各国で古くから神の使いとされ、信仰の対象であった。また一方で、ときには人の命を奪い、暮らしを脅かす執念深い存在ともされた。町内にもヘビに関するまじないや言い伝えが数多く残っており、マムシが家に入ってこないように、正月の二五日に小豆粥を炊き、鍋釜を洗った水を庭にまくヘビマジナイや、尻尾が切れたように短いヘビを神の使いとし、家々で大切にしたり、という記録が伝わる。

野曾地区にある漣沼にはこんな話がある。

はるか昔、村の若者一人が草刈りに行ったところ、大蛇が現われ、たちまち一人を丸呑みにしてしまった。連れの男が大蛇の腹を裂き吞まれた男を救い出したが、その男は死んでしまった。大蛇のいた場所に村人たちを連れて行くと大蛇は姿を消していた。その後の言い伝えで、沼のほとりを三回まわると水中に大蛇の姿が映るといふ。

また、大蛇が棲む場所とされた赤坂地区の弁天池では、中央にある弁天様の祠を目をつぶり三回まわると白蛇が現れるという話もあり、大蛇を主「ヌシ」とし、それに纏わる言い伝えも残る。

季節は春。野山や田を春の風が駆け巡り、冬眠から目覚めるヘビを、単に気持ち悪いと嫌がるだけでなく、この地でも生きる動物なんだな、と敬う心も大切なのではないだろうか。

参考文献:茨城の民俗 第18号 茨城民俗学会



茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である澗沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です